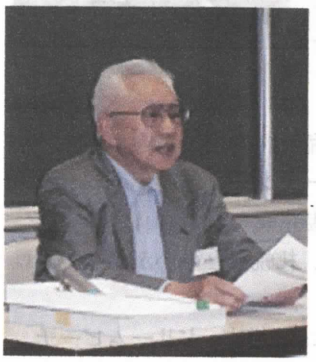
郷土史 ていね
第 18 号
平成 21 年 6 月 10 日
手稲郷土史研究会会報

第 37 回（平成 21 年 5 月 13 日）定例会の研究発表要旨

「前田家」余話～前田利為侯出身地を訪ねて～

いろいろと学ばせてもらいました

手稲前田　川崎吉充会員



加賀百万石前田藩（加賀藩）に起因する手稲前田地域。本家本元の石川県金沢等では、ここ北海道石狩の地に出現した前田農場、ましてや 15 代当主利嗣侯、16 代利為侯（17、18 代も来町）が農場巡視された縁（ゆかり）の地にもかかわらず、手稲前田が良く知られていない。市有権未（いま）だ先と思われる。むしろ歴史的にも北海道の前田村（現共和町）と口にする。

その共和町について、平成 19・11・14 川崎会員は「もう一つの前田、共和町前田と現地を訪ねて」と題して明治 16 年からの入植史を発表された。

嫡男のない利嗣侯が明治 33 年 6 月 14 日死去するが、その直前三分家の一つ七日市前田家から養嗣子として宗家にやってきた利為侯である。今回も七日市藩の歴史を明かすため、遠路群馬県富岡市まで足を運ばれた発表者。地図上で七日市の位置を教示され、現地の大島郷土史家の解説も交えながら、実に参会者を魅了させる内容であった。この富岡市七日市が利為侯の出身地、良く理解できた。

富岡市と云えば、近代工業発祥地であり富岡製糸場が有名である。こちらも又、提供資料をもとに興味関心大で「百聞は一見に」させて頂いた。養蚕が盛んだった富岡市、札幌の開拓期、「桑園」が誕生に至った似通った話から、手稲一帯にも自生する桑の木へと一段と盛り上がる場になった。因みに私たち上手稲村に移住した白石城主片倉小十郎の家臣三木勉らは養蚕も生活の糧であった。6 月には「養蚕休み」が設けられ、子ども達も総動員させられた。当然ながら、「上手稲・下手稲小学校の実業科に養蚕を加設」という記録もあり、現に「手稲記念館」には、お蚕さんの道具が展示されている。「手稲と養蚕」今後例会の研究テーマになり得る。

最後に川崎講師の結びに、東京から新幹線を乗り継いで約 1 時間半、富岡市七日市を訪ねてみたい。新たな発見が期待できそうだ。

札幌出身の保阪正康と七日市の結びつき、加賀前田家が関東（江戸）一円の情報源として存在する七日市、推論が実証へと願う。

さて手稲郷土史研究会は、地元手稲酪農の先達としての前田農場経営全般は学習した。川崎会員の 2 回にわたる視点を変えての前田家追究、更には、吉田寛義会員ご自身が陸士第 60 期の立場で軍人「前田利為侯とシベリア出兵」を語られた。この後、軽川前田農場の小作としての移住史も残された課題かと思う。川崎会員の手法に学び、石川県等に立ち寄り現地の資料館と連携を密にして進めたいものである。

追記だが、今発表レジメから手稲史に関わって一大発見をさせて頂いた。北海タイムス大正 12・5・19 付けに「前田遞相一行が、中崎村長初め村有志、小学生徒たちの出迎えを受け軽川駅に下車、1 時間半程度で前田農場を視察し小樽に向かう」記事がある。この遞信大臣こそ利為侯の年の離れた長兄、七日市前田家 13 代当主利定子爵で、当時貴族院議員の立場で北海道を視察されていた。同記事中に「前田家茨戸分場に数年前より在住の遞相の令弟定久氏も来場」と記され、兄弟で利為侯の農場を親しくご覧になられたと云う、身分肩書きを脱ぎ捨てたところの兄弟愛が読みとれる。多謝。　［文責：茂内］

次回の予定

次回（7 月 8 日）は、元札幌市資料館郷土史相談員工藤一廣氏の講演「『札幌の教育文化』～上手稲の誇る時習館など～」と佐藤至会員の研究発表「国鉄運転士わが人生 ― 手稲区内の鉄道の歩みなど―」を予定しております。

第 37 回（平成 21 年 5 月 13 日）定例会の研究発表要旨

「手稲区の 20 年をちょっと振り返ってみませんか」

手稲稲穂　　上仙　学　会員

上仙会員の今回の講話を聴いて、手稲ってこんなにすばらしいマチなんだ、「ていねっていいね！」を実感しました。実際に、札幌市、手稲区の街づくり行政に永年携わってこられた豊富な実務経験からの苦労話もふんだんに盛り込まれており、ウラ話や公式には聞かれなかった情報があって、興味そそられた 1 時間でした。発表資料も充実しており、年表作成担当には、貴重な資料となりました。
以下、その概要を紹介します。

……

手稲村が発寒村から分村した 1872（明 5）年から今日までの手稲の歴史がコンパクトに年表としてまとめられた「手稲村から平成 20 年までの主なできごと」に沿って説明。明 14 軽川停車場設置～大 5 山口スイカ栽培開始～昭 42 札幌市と合併～昭 46 高速札樽バイパス～手稲鉱山閉山～昭 47 札幌五輪冬季大会～政令指定都市・7 区制（西区所属）～昭 53 手稲下水処理場完成～昭 55 稲積公園オープン～昭 60 星置駅～昭 61 稲積・稲穂・発寒・発寒中央駅相次いで開設～平 1 手稲区発足（9 区制）～平 4 前田森林公園完成・カッコウの森キャンプ場オープン～平 7 手稲パラダイスヒュッテ再建～平 14JR 手稲駅新駅舎・「あいくる」自由通路完成（翌 15）～平 18 山口斎場完成～平 21 山口緑地など。

手稲区 20 年を振り返るには、先ず手稲区の概要を把握しておくとして、区の立地、開祖、札幌市とのかかわり、人口の推移の説明がなされた。

位置関係～札幌市の北西部にあり、隣接は、手稲山の尾根を境として南区、小樽市、北側は、小樽市、ドリームビーチ、石狩市に接する。面積は、56.92 平方キロ（東西 10.8、南北 9.4km）10 区中 6 番目の広さ。明治初期に交通の要所（小樽←→札幌）、陸上輸送の中継点として開けた。明治の中頃、山口県（手稲山口）と広島県（星置）から入植し、農耕地開墾や酪農場を開いていった。明治 20 年代、手稲鉱山が発見（金鉱脈など）され、昭和 10 年代最盛期。昭和 42 年札幌市と合併。以降、新興住宅地として目覚しい発展を遂げ、今日に至る。昭和 47 年、札幌市の政令指定都市移行に伴い 7 区制（西区に編入）となった。この年札幌冬季五輪が開催され、手稲山も競技施設の一つとなった。平成元年、人口の著増に伴い、西区から分区し、手稲区が誕生、9 区制に（厚別区）。

手稲区の人口推移を見ると、昭 10、6,699 人、昭 42（札幌市と合併時）30,866 人、現在（21.1.1）138,846 人と推移している。昭和 10 年から現在を比べると札幌市は 9.6 倍に、手稲区は実に 20.7 倍に増えている。

さて、以上の年表説明と手稲区の概要の基礎知識を下敷きとして、いよいよ「手稲区の 20 年」のエポックとなる重要事案が 6 点に絞り説明された。すなわち、

① 手稲区役所の誕生（平元）

区民センターホールの 200 座席のリモコン自動出し入れは圧巻。見学者の人気の的。照明、音響装置も優れものだが使い切れていない。また、ホールのレリーフ（壁画）は、エンドウ豆、鳥、宇宙をモチーフとし、13 か国語で説明されている。

② 前田森林公園造成、完成の概要（昭 57～平 4）

札幌市の「環状夢のグリーンベルト構想」の手稲区の拠点公園であり、新たに森林を作り出した公園。運河（カナール）と手稲山を正面に遠望できる景観は実に雄大。また手稲区第 1 号のパークゴルフ場はここ。

③ 手稲駅（新駅舎）完成と市街地再開発事業（平 14）

再開発事業での問題点は、借地権者や複数テナントの建物が多かったことが開発に多大な困難をもたらした。自由通路「あいくる」は、一般市道と同格とのこと。

④ 山口斎場完成（平 18 供用開始）

札幌市初の民間資本活用の社会資本整備事業であった（PFI 方式）。

⑤ 指定管理者制度の導入（平 15）

公共施設で独立している建物の管理運営を民間に委託する制度、小泉行政改革の一環。（平成 20 年 4 月現在、札幌市は 405 施設を 79 の指定管理者に委託）。

⑥ 山口緑地の概要（平 11 第 2 処理場完成。平 31 まで継続中）である。

緑の基本計画に位置づけされ、ゴミ埋立地の緑地化が目的。環状グリーンベルト構想の一つでもある「みどりのネットワーク構想」で、山口緑地は、平地系、手稲緑地ゾーンである。事業期間は平成元年から平成 43 年と長い。面積は 112.6ha もある。

［文責：加藤］